中南米マメ知識

答えは中面にあります。

（問題１）
ドミニカ共和国で最も盛んなスポーツは野球です。米メジャーリーグをはじめ、日本球界にも多くのドミニカ共和国出身の選手がいます。そのドミニカ共和国に日本のプロ野球チームのアカデミー（学校）があるのですが、そのチームはどこでしょうか？

（問題２）
アメリカ合衆国の大統領官邸は「ホワイトハウス」と呼ばれていますね。では、アルゼンチンの大統領府はなんと呼ばれているでしょうか？

（問題３）
ボリビアには海がありません。海のない国であるにもかかわらず意外や意外、○○を持っています。○○とは一体なんでしょうか？（漢字２文字）

（問題４）
移住者・日系人は様々な面で移住先国の発展に貢献しています。特に、農業技術の向上（不耕起栽培）や新規作物（胡椒、ジュート麻）の導入など農業分野での貢献は目覚ましいものがあります。このように、移住者・日系人は移住した国々でその国の発展に貢献し、地域社会から信頼される存在となっています。ブラジルでは、そんな移住者・日系人を表す特別な言葉があります。どんな言葉でしょうか？

（問題５）
「銀ぶら」って、「銀座でぶらぶら歩く」こと？

（問題６）
パラグアイの国旗は世界でもとても珍しい国旗です。いったい、どこが珍しいのでしょうか？

JICA ボランティアウェブサイト
http://www.jica.go.jp/volunteer
JICA ボランティア 検索

独立行政法人 国際協力機構（JICA）
青年海外協力隊事務局募集課
（JICA ボランティアへの応募に関するお問い合わせ）
〒102-8012
東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
TEL：03-5226-9813

2016年3月

ちょっといい話

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、戦後最大の「国難」とも言うべき被害に見舞われた日本に対して、世界各国・地域からたくさんの支援の手が差し伸べられました。日系社会ボランティアを派遣している国・地域の日系人からも、励ましのメッセージと多くの支援が寄せられました。

パラグアイ

移住地の大豆で作った豆腐を被災地へ「心はひとつ」―パラグアイならではの支援を

約 7,000 人の日系人が暮らしているパラグアイには、東北からの移住者も多くいます。震災後、彼らはパラグアイならではの支援活動として、日系農家が生産する遺伝子組み換えでない大豆を使った「心はひとつ　豆腐 100 万丁支援プロジェクト」を展開しました。これに賛同した日系農協の組合員は大豆 100 トンの提供を申し出、日系人団体は豆腐製造資金の一部となる 1,000 万円の募金活動を実施。パラグアイから提供された大豆は、従来から日系農家と大豆の取引を行っていた日本の業者の協力を得て加工され、プロジェクト開始から 10 ヶ月で累計 100 万丁の豆腐が被災地に届けられ、「豆腐 100 万丁支援プロジェクト※」は達成されました。

株式会社ギアリンクスの HP でも詳細が紹介されています。
＜http://www.gialinks.jp＞
※2016 年 2 月現在、このプロジェクトは終了しています。

ブラジル

和太鼓の響きで復興支援を！

ブラジル北部のサルバドールで活動している和太鼓グループ「和同」。震災のニュースを知った 10 代～ 20 代のメンバーたちは、甚大な被害を受けた日本人の痛みを遠いブラジルでも分かち合い、日本の復興のために何かしたいと考え、ブラジル中で同じ日の同じ時刻に和太鼓を演奏し、復興のための「気」を送ることを思いつきました。この提案は即座に e-mail や電話、Facebook などで拡散され、2011 年 4 月 17 日、首都ブラジリア時間の午前 10 時、ブラジル各地で一斉に力強い和太鼓の音が轟きました。北はマナウス、ベレーンから南はサンタカタリーナ州のフロリアノポリスまで、ブラジル中の 25 地域から 33 もの太鼓グループが参加。このイベントには日系人だけでなく、地元のブラジル人もたくさん訪れ、復興への祈りや日本へのエールが送られました。

（写真、情報提供：日系社会シニア・ボランティア経験者　野中真茶子さん）

出典：海外移住資料館だより
「ニッポンへ支援の手を！～世界中の日系人からエール続々と～」
＜http://www.jomm.jp/newsletter/tayori23_01.html＞

FAQ よくある質問

Q 日系社会とはどんなところですか？

A 戦前・戦後を通じ、我が国から海外に移住した人々は南北アメリカを中心に約100万人いると言われています。移住先国では、日本国籍のまま居住している人、居住国の国籍を取得した人、そしてその国で生まれた人など、現在では中南米だけをとってみても約170万人の移住者・日系人が在住しています。これらの移住者・日系人が比較的多く居住している地域では日系人団体を組織し、日系人同士の親睦及び相互扶助活動のみならず、地域社会との交流・融和のための活動を行っています。現在では、日本人移住者が開拓した地域においても、その多くが地域社会の一構成員となっていますが、これら移住者・日系人の地域を限定しない広がりを総称して日系社会と呼んでいます。

Q どんな分野での活動が求められますか？

A 最も要請数が多いのは、日系社会の次世代を担う日系子弟を対象とした継承日本語教育に従事する日系日本語学校教師です。また、１世、２世の高齢化対策を担う高齢者介護や保健師などの福祉系のボランティアも多く求められています。近年、スポーツや日本文化を通じた人材育成が注目され、野球や体育指導、日本文化指導といった要請も出されています。また、日系コミュニティの活性化を通じて地域社会を活性化するボランティアとしてコミュニティ開発に対する期待も高まってきています。

Q 青年海外協力隊・シニア海外ボランティアの日本語教育と日系日本語学校教師との違いは？

A 日系社会青年ボランティアの日系日本語学校教師の指導対象は主に日系子弟となります。技術的には日本語教育的手法（一部、国語教育的手法）を用いて指導を行いながら、同時に日本文化や日本人移住史、日系人の貢献などに触れさせ日系人としてのアイデンティティを育む継承日本語教育に従事することになります。一方、日系社会シニア・ボランティアの場合、継承日本語教育に従事する現地教師の養成、育成のため、各校の巡回指導や研修会の企画運営などを行います。

帰国ボランティアの今

平成25年度派遣（29回生）
日系社会青年ボランティア
坂柳（さかやなぎ） 言衣（ことえ）さん
派遣国：ブラジル
職　種：小学校教諭
現　職：中学校教諭

私にできること、私にしかできないこと

派遣前に勤務していた公立小学校で外国籍児童に関わるうち、彼らの母国について学び、彼らの気持ちをもっと理解したいと思うようになり、現職教員特別参加制度での応募を決意しました。

ブラジルでの約 2 年間は私立の学校に配属され、幼稚園児から日本語能力試験 N2 レベルの生徒まで、現地の先生と一緒に週 13 コマの日本語の授業を担当していました。現地の先生と協力して、日本の文化や音楽、美術の授業も行いました。ポルトガル語や現地の教育事情についても学ぶことができ、派遣前からの夢を叶えることができました。

現在は愛知県の中学校で学級担任と日本語指導を兼務しており、学級運営や道徳、総合学習などを行いながら、日本語指導が必要な生徒に対する授業を担当しています。ブラジル系の生徒に「ブラジルだとこうだよね」と例を出すと、「わかった！」と笑顔になることがあります。ポルトガル語の通訳・翻訳をしてくださる市の相談員の方も毎週来てくださいますが、急な電話や家庭訪問など、私が代わりに対応することもあります。「ポルトガル語がわかる人がいてくれてよかった」と生徒や保護者、先生方に言われると、ボランティアの経験が生かされている喜びとやりがいを感じます。学級の生徒もブラジルの話をすると興味をもって聞いてくれ、国際理解教育にも役立っていると感じます。今後もこの経験を生かし、私にできること、私にしかできないことをしていきたいと思います。

平成21年度派遣（25回生）
日系社会青年ボランティア
黒木（くろき） 豪（ごう）さん
派遣国：ブラジル
職　種：野球
現　職：大学職員

一人でも多くの国際人を養成したい！

ボランティアの任期が終了して日本に帰国した後、再度ブラジルに渡りブラジル代表チームの打撃コーチを務めました。チームは 2013 年開催の WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）に出場し、惜しくも日本に負けてしまいましたが、ボランティアへの参加をきっかけに素晴らしい経験をさせていただけたことにとても感謝しています。

その後は、母校である日本体育大学の国際交流センターに勤務し、硬式野球部のコーチも兼務しています。この仕事に就くきっかけは、本当に突然のことでした。WBC 終了後に挨拶のため本学を訪れたのですが、そこで「国際人を養成して欲しい！」とお誘いいただいたんです。現在は、スポーツを通して培った力を海外で生かしたいと考える学生のキャリア支援を担当。目指す進路の実現のためにはどのようなことが必要なのか、準備から心構えに至るまで、JICA ボランティアの経験をもとにアドバイスしています。学生の反応を見ると、やはり経験者の言葉には耳を傾けてくれる傾向があり、自分自身が苦労した経験や成果などを話すとグッと表情が変わります。そんな時にいつも感じるものがあります。「経験に勝るものは無い」と。これからも、国際社会で活躍する人間を一人でも増やせるよう、尽力して行きます！

日系社会の歴史

日本人移住の始まり

日本人の海外移住は1868年（明治元年）、ハワイ王国へのサトウキビ農場で働く労働者としての移住から始まり（所謂「元年者」）、その後1885年から10年間で「官約移民」と呼ばれる約2万9千人の日本人が海を渡った。

ハワイから北米、そして南米へ

その後、ハワイ王国がアメリカ合衆国の一部となると、ハワイからアメリカ本土へ、日本からアメリカ本土へ向かう人も増えたが、当時の社会情勢や日本人の移住者が増えるにつれ、日本人移住者を受け入れない動きが強くなった。一方、南米では労働力確保のため移民誘致が積極的に行われた。1886年アルゼンチン、1897年メキシコ、1899年ペルー、ボリビア、そして1908年にブラジルへの移住が始まった。その多くは、コーヒー農場の労働者など農業従事者として働いた。最初は出稼ぎ目的であったため、お金を稼いで故郷に錦を飾ることを考えていた。移住者の出身県としては、広島、沖縄、熊本、福岡、和歌山などが特に多かった。

戦争の勃発。移住者の暮らしの変化

第二次世界大戦が勃発すると、アメリカやカナダでは日本人とその子孫である日系人は敵国人とみなされ、多くの人が土地や家、財産を没収されたり、「強制収容所」に収監された。南米でも住む場所が制限されたり、日本語学校が閉鎖されたりと、日本人移住者の生活はすっかりと変わってしまった。

戦争が終わって

戦争が終わっても、アメリカ大陸では、日系人に対する偏見や差別は簡単に消えなかったが、そのような状況にあっても日系人は日本に救援物資を送る運動を起こし、毛布や粉ミルクなどたくさんの生活物資を日本に送った。これらの品々は「ララ物資（LARA*）」と呼ばれ、日本人の6人に1人がその恩恵を受けた。

*LARA：Licensed Agencies for Relief in Asia（アジア救援公認団体）の略

日本人移住の再開

戦後、日本人の海外移住が再び始まるようになると、多くの日本人が南米の国々へ渡った。JICAは戦後、主に中南米への日本人移住に関する業務を行ってきたが、1993年に移住者の送出業務を終え、その役割を移住事業から日系人支援事業へと変え、現在も様々な事業を行っている。

詳しくは… http://www.jomm.jp JICA海外移住資料館 検索

行こう、もう一つの日本へ

日系社会青年ボランティア
日系社会シニア・ボランティア

日系社会ボランティアとは？

中南米の日系社会で、自分の持っている技術や経験を活かしてみたい。そうした強い意欲を持っている方を派遣し、支援するのが日系社会青年ボランティア／日系社会シニア・ボランティア事業です。日系人、日系社会の人々と、ともに生活・協働しながら中南米地域の発展のために協力しています。

今日も中南米の国々で多くのボランティアが活躍しています。

日系社会青年ボランティア

和田谷（わだたに） 光輝（みつてる）さん

派 遣 国：パラグアイ
派遣期間：2014.7.8 ～ 2016.7.7
職　　種：コミュニティ開発

地域をつなぎ共に生きる

パラグアイ最古の日系移住地であるラ・コルメナ。日本の伝統や文化が色褪せることなく残り、古き良き日本の風景を思い出させるような穏やかでとても住みやすいところ。2016 年に移住 80 周年の節目を迎える歴史ある町が私の任地です。移住から永い年月が経つと各家庭の生活スタイルが変わってくるのは当然ですが、ラ・コルメナの日系人の人たちは、日本語を話すことはもちろん、日本食を食べ、NHK を見たり、何かあるときは地域のみんなが協力して行ったりと、日本の反対側に本当にもう一つの日本があるように感じます。

私はこの地にあるラ・コルメナパラグアイ日本文化協会という日系の団体に所属し、地域活性化につながる活動をしています。毎週行われる週末市や地域の学校での環境教育や交通教育の実施、市と共催で行われるイベントの準備や調整役を担ったりと活動の幅は広く、いわば「地域の何でも屋」です。

活動をする上で一番大切にしていることは人との関係性です。どんな仕事をする上でも大切で当たり前ですが、この関係性がしっかりできているかどうかで仕事の質も変わってくるのではないかと思います。民間企業での社会人経験や地域おこし協力隊での活動がパラグアイに来てからも活かされていると思います。もちろん悩むこともありますが、ボランティアとしてではなくひとりの人間として任地の人に受け入れてもらえていると感じるときが一番幸せです。

「日本に帰国してからもずっと関わっていきたい!」心からそう思えるのがラ・コルメナ。おそらく今まで活動をしたボランティアみんながそう感じていると思います。

日系団体の声

みんなをつないでくれるボランティア

和田谷さんはラ・コルメナパラグアイ日本文化協会の地域開発部というところで、市役所や学校などの組織と協力をし、地域活性化に取り組んでくれています。また、地域開発の活動に限らず文化協会の仕事や地域の行事にも積極的に参加してくれとても助かっています。また、コミュニティ開発のボランティアが来てくれるようになり、「自分たちの地域のことは自分たちで良くしていこう」という気持ちが徐々に芽生えてくるようになりました。ボランティアの派遣に感謝しています。

ラ・コルメナパラグアイ日本文化協会会長
根岸作嘉さん（写真左）

（問題 1 のこたえ）広島東洋カープです。若手有望選手の育成を目的に 1990 年に設立されました。アカデミー（学校）のあ ることが、サンペドロデマコリスはラテンの陽リメレンガが盛んで、たくさんのメジャーリーガーの豪邸が並んでいるんですよ。

日系社会青年ボランティア

浅利（あさり） 章太（しょうた）さん

派 遣 国：アルゼンチン
派遣期間：2015.6.29 ～ 2017.6.28
職　　種：野球

「ベースボール」と「野球」の調和

首都ブエノスアイレスから南東 50km の日本人移住地に、ラプラタ日本人会野球部があります。この移住地には、盛んな花卉栽培のビニールハウスが一面に広がり、毎年 1 月には 1 万 5 千人規模の盆踊り大会が開催されています。私はここで 6 歳から成人までの幅広い年代の選手に野球指導をしており、平日の練習や週末の試合での指揮が主な活動です。その他、近郊の 2 つの地域へ巡回指導も行っています。

日系人の選手は、緻細で確実性の高いプレーが求められる日本野球への尊敬の念を抱く一方で、攻守共に豪快で派手なプレーに目を奪われるアメリカのメジャーリーグから影響を大きく受けているということを見て感じることが出来ます。実際には身体の作りが日本人に限りなく近い為、私はメジャーの選手より日本人選手の身体の使い方を参考にする方が合理的であると考え、日本式の指導をしています。技術以外の面では、試合後に観衆やグラウンドへ一礼する姿が非日系人チームから一目置かれ、私たちを真似して一礼する「儀式」が浸透しています。現在ある良い部分に日本式を調和させることで、日系人チーム特有のスタイルを築いています。日本国内で指導するのとは一味違った醍醐味が、ここ日系社会にはあります。

指導を行っていく上では、指導の「引き出し」が豊富でなければいけません。その点では、派遣前にプロ野球やアマチュア、そして海外などで指導やプレー経験を積んだ方の元へ積極的に足を運び勉強したことが、大いに活動に活かされています。現在は指導者という立場ですが、私自身も常に何事も学び吸収する姿勢を忘れないように心掛けています。将来、野球をやっていて良かったと思ってもらえるように、選手と共に日々精進していきたいと思います。

日系団体の声

野球ボランティアから学ぶ、日本人の心

私たち野球部にとって、JICA ボランティアは不可欠な存在です。前任の方々は、野球の技術だけでなく日本人の心も教えてくれて、大きな影響を与えてくださいました。現在の浅利さんも、配属直後から選手たちへの指導に毎日全力で励んでくれています。こんな素敵な活動を継続して、いつも協力してくださるJICA ボランティアにはとても感謝しています。

ラプラタ日本人会野球部
宮脇フェルナンドさん

（問題 2 のこたえ）スペイン語で "Casa Rosada（カサ・ロサーダ）" と呼ばれています。" Casa" が「家」" Rosada" が「ピンク」なので、英語にすると「ピンクハウス」ですね。外壁はその名の通りピンク色に塗られています。

日系社会シニア・ボランティア

山下（やました） 圭子（けいこ）さん

派 遣 国：アルゼンチン
派遣期間：2015.6.29 ～ 2017.6.28
職　　種：ソーシャルワーカー

一人じゃない!みんなで支えるアルゼンチンの日系福祉。アミーゴ!

日本とは真逆の気候を持つアルゼンチン。国土は日本の 7.5 倍。約 6.5 万人の日系人の方が生活をされています。その日系人社会（団体）の連合体組織、FANA（在亜日系団体連合会）の福祉委員会が私の配属先です。主な活動は、移住生活を営み、永年アルゼンチン社会で努力し、日本人としての地位を確立してこられた方たちの高齢者集会を訪問し、健康長寿に繋がる運動や栄養講座、脳トレなどの活動をしています。また、日本語学校や集会場で高齢者の方々を対象に福祉に関する知識を深める活動や、日本での介護技術を紹介しています。高齢者の食事やレクリエーションを手伝って下さる現地の若者や熟年のボランティアグループと協力し合いながら、そして高齢者の方に「ああ楽しかった。また来ます」と言って頂けるように、「より楽しく、より元気に」を心がけ活動しています。アルゼンチン日系人の方は明るく、フレンドリーで活動的です。そして、とってもおいしい日本料理を作ります。そんな頼もしい日系社会の中で他のボランティアの方々と一緒に歴代 JICA ボランティアが築いた土台を基に「みなさんの笑顔、笑い声」を楽しみにしながら、日系社会の健康長寿のため活動しています。

おいしいお肉に、おいしいワイン!メタボリック症候群にならないかと気にしながら、カバンをしっかり握りしめ、地下鉄、バスを乗り継ぎ、石畳の道を歩いて、歩いて。
行ってきま～す。

日系団体の声

笑いと運動で元気倍増。集まりを楽しみに待つ高齢者が増えました。

日本人会を中心に、青年部、婦人部、母の会、父の会等が協力して地域の高齢者の集会をお手伝いしています。歴代ボランティアや山下さんが来てくださり、アルゼンチンでの移住生活の中、自分達を大切に育ててくれた両親、家族、地域の方々が元気で楽しそうにしている姿を見ると嬉しくなります。ボランティア派遣は高齢者の方々だけでなく、私達の励みにも繋がっています。

フロレンシオ・バレーラ日本人会長
上原 Fernando 氏ご夫妻
（前列左から 2 番目 3 番目）

（問題 3 のこたえ）「海軍」です。アンデス山中の標高 3,800m に位置するチチカカ湖や、アマゾン川上流に駐留しています。

日系社会シニア・ボランティア

蓑輪（みのわ） 敏泰（としやす）さん

派 遣 国：ブラジル
派遣期間：2014.7.14 ～ 2016.7.13
職　　種：文化

和太鼓の響きが伝える日本人の心

年間約 50 ～ 60 ヶ所の日系社会を訪問して和太鼓の普及活動をしています。小さな町にも日系人は住んでいて、集会のための会館を築き、カラオケ、ゲートボールなどのサークル活動も活発です。特に和太鼓は子供向けの数少ないサークルでもあり、太鼓の運搬や練習会場への送迎、食事の差し入れなど親も積極的に協力してくれます。ブラジルの学校では音楽という教科がないためか、和太鼓特有の「間」の取り方などは日本での指導より時間を要することもあります。

7 月に開催されるブラジルチャンピオン大会では、ちびっ子、ジュニア、自由、マスター、大太鼓一人打ちの 5 部門に約 350 名もの参加があります。特にジュニア部門の優勝チームは日本でのコンクールに招待されるとあって、練習にも熱が入ります。ここ 4 ～ 5 年でオリジナル曲が増えてきたのは、チームリーダー養成の証と思われます。また、きをつけ・休めの姿勢、話を聞く態度、中座していい時のけじめ、練習中であってもピアス、ネックレス、腕輪等をつけないなどの規律を厳しく指導してきました。日系人の親にも感謝されています。演技指導を通じて日本人らしい礼儀作法や規律を守ることの大切さも伝えていけたらと思います。

日本の約 23 倍の国土を持つブラジルでは移動だけで一苦労。移住地の訪問はボランティア一人では限界があり、まだ訪問できていない日系社会が多数あります。日本太鼓財団公認指導員 3 級以上をお持ちの方、ブラジルで和太鼓文化を守り伝えてみませんか?

日系団体の声

響け!和太鼓!ブラジルの大地に!!

この数年、日系社会のフェスティバルや記念行事の新聞記事の中に和太鼓演奏が載らないことはないぐらいブラジル各地に「和太鼓」の響きが伝わっています。礼・節を重んじる「和太鼓」の精神をこれからもブラジル中に広めるべく、ブラジル太鼓協会としても努力して参ります。ボランティアの派遣に感謝します。

ブラジル太鼓協会会長
オルランド島田氏（写真前列左）

（問題 4 のこたえ）ジャポネース・ガランチード（保証付きの日本人）。約束を必ず守り、責任を持って仕事を果たす。コツコツとマジメに働いてきた日本人移住者が築あ上げてきた信用が、「日本人、日系人なら間違いはない」という絶大な評価としてこの言葉に込められているのです。

日系社会青年ボランティア

住友（すみとも） 夏代（なつよ）さん

派 遣 国：ブラジル
派遣期間：2013.7.2 ～ 2015.3.21
職　　種：小学校教育
※現職教員特別参加制度（日系）

失敗を恐れず、一歩踏み出す！

「センセイ　おはよう！」

今日も子どもたちの元気なあいさつで一日が始まります。

ブラジル・サンパウロにあるミラソウ学園が私の活動場所です。保育園から中学校までの陽気な子どもたちの多くは日系人で、「おすしが好き」「折り紙でつるを折れるよ」など日本をどこか身近に感じているようです。

私は現地の先生と協力して、日本の小学校で培った経験を生かしながら、日本語の授業や折り紙、書道など日本文化を体験できる授業づくりに励んでいます。3 月には運動会もあり、中学校の生徒と組体操を行いました。

私がやりたいと提案したことすべてに、現地の先生方は「やってみましょう!もしできなくてもやり方を変えればいいから。」といつも背中を押してくれます。日本にいた時は、失敗を恐れて、やりたいことを進んで行わなかった私にとって、この一言はとてもうれしいものでした。一歩踏み出すことで世界がこんなにも明るく、楽しいものになる。前向きに頑張ることを学びました。

日本に帰ってからも、ブラジルと日本の子どもたちが少しでもつながりを感じることのできるような活動をしていきたいと考えています。

日系団体の声

「先生と話したい！」が、日本語学習の励みに。

住友先生には、太鼓・組体操・習字・歌・踊り・係活動の指導のほか、日本の学校との手紙の交換や掲示板を使った日本紹介などを通して、生徒たちに生きた日本・日本文化を伝えてもらっています。

日本からやってきた先生ということで、生徒たちも頑張って日本語を使おうとして、先生の存在自体が日本語学習の励みにもなっています。

ミラソウ学園
写真左から、清水 晴美さん、DIANA YING SHIANG TSAI DE CHEN さん、CHEN TENG KUEI さん、中田 ゆかりさん

（問題 5 のこたえ）元々の由来は「銀プラ（銀座でブラジルコーヒーを飲む!）」という言葉。今も昔もブラジルはコーヒーの大生産国。日本人移民がつくったコーヒーを飲ませる店が銀座に開店し、「銀ぷら」という言葉が流行りました。当時の総理大臣・大隈重信は「移民が生産しているブラジルコーヒーは準国産品だ」と大いに宣伝していたんですよ。

日系社会青年ボランティア

武田（たけだ） 紗里（さり）さん

派 遣 国：ボリビア
派遣期間：2015.6.29 ～ 2017.6.28
職　　種：日系日本語学校教師

古き良き日本と多文化共存社会が混じりあう場所で

2015 年に入植 60 周年を迎えたサンフアン移住地。私の活動するサンフアン学園は、日系人団体が運営する小中一貫校です。全校生徒のうち 6 割がボリビア人、4 割は日系 3 世、4 世の生徒です。彼らは、午前はボリビアの教育課程で授業を受け、午後は日本語を勉強します。

この学園の素晴らしいところは、ボリビア人も日本語を学び、日本文化に触れながら生活しているところです。生徒達は人種など関係なく一緒になり、広い校庭を走り回ったり、日本語の本を読んだりしています。また、お弁当を持ってくることや自分で学校を掃除することが生活の一部になっている生徒達を見ていると、異文化を受け入れている子供たちに、未来の日本をみているような新鮮な感覚があります。学校の外でも、盆踊りや文化祭、スポーツ大会などのイベントが多く、移住地の方々が自分たちで作り上げようとする地域の繋がり、絆の深さを感じます。

現地の先生方は向上心が高くて努力を惜しまず、とても尊敬しています。私もこれまでの日本語教師経験を活かして、先生方との研究授業や日本語教育に関する情報提供を行っています。ボリビア人の生徒が習いたての日本語で話しかけてくれたり、普段スペイン語を話したがる日系の生徒も私には日本語で話そうと努力していたり、「日本はどんなところ?何があるの?」と興味深そうに聞きに来たりする生徒たちと過ごしていると、自分が日本人であることに意味があるんだと感じ、子供たちと過ごすことをより楽しく感じるようになりました。日本人をもっと身近に感じてもらい、自分と日本の共通点をたくさん見つけてもらえるような日本語指導をしていきたいです。

日系団体の声

新しい風を

着任当初から色々なことに興味を持ち、積極的に現場の状況を理解しようと努力して下さっています。インターネットを活用した生徒同士の交流など彼女ならではの新しい活動を取り入れた学習はとても興味深いものです。
また、若手教師への授業計画の立て方や教材の使い方、日本語に関することなど色々な面でアドバイスをいただき、サンフアン学園には欠かせない存在になっています。

サンフアン学園日本語科主任
本多由美先生

（問題 6 のこたえ）パラグアイの国旗は表と裏があるんです。表にも裏にも中央に紋章が付いているんですが、そのデザインが違うのです。表には国章、裏には「平和と正義」の文字とともに「自由の帽子」とそれを守るライオンが描かれています。